増上寺藏宋版大藏經について

伊藤 文

思溪藏（湖州版などともいう）に、円覚禪院版と法宝資福禪寺版の二種があることはすでに周知のところであるが、増上寺所藏の宋版（以下、増上寺本と略称す）は、前者すなわち円覚禪院版である。

円覚禪院版の開板印造は、増上寺本『解脱道論』巻一の刊記に、丙午靖康元年二月旦、修武郎閻門祇候王冲允、親書此経開板、結大藏之因縁

とあり、加えて、増上寺本と同一の喜多院宋版一切経の『阿毗達磨識身足論』巻六の「刻藏題記」（増上寺本にはない）に、

大宋国両浙路湖州帰安県松亭郷思溪居住、左武大夫密州觀察使致仕王永從・同妻恭人嚴氏、弟忠翊郎永錫・妻顧氏、姪武功郎冲允・妻卜氏、從義郎冲彦・妻陳氏、男迪功郎冲元・妻莫氏、保義郎冲和・妻呂氏与家眷等、恭為祝延今上皇帝聖躬万歳、利益法界一切有情、謹發誠心、捐捨家財、開鑿大藏經板愬五百五拾函、永遠印造流通、紹興二年四月 日謹題、雕經作頭李孜・李敏、印經作頭密策、掌經沙門法己、对経沙門仲謙・行堅、幹雕經沙門法祖、对経慈覚大師静仁・慧覚大師道融・賜紫修敏、都对証湖州覚悟教院住持伝天台祖教真悟大師宗鑑、勸縁平江府大慈院住持管内掌法伝天台教説法大師浄梵、勸縁住持円覚禪院伝法沙門懷深

とあるところから、王永從とその同族とによって、北宋末の靖康元年（一一二六）ごろより紹興二年（一一三二）ごろにかけて、その刊行事業がなされたことが知られる。

湖州帰安県は今の浙江省呉興県に位置し、円覚禪院はその思溪（村）に在ったことが、次の『湖州府志』巻二七輿地略寺觀上の、円覚禪院 在府城東南思溪、宋宣和中、那人密州觀察使王永從与弟崇信軍承宣使永錫創、賜額法宝寺吳興府志、有塔十一層及藏經五千四十八卷印板作経坊同上、今廢胡志

と、またさらに『帰安県志』巻一〇輿地略一〇寺觀の、円覚禪院 在思溪、宣和中、土人密州觀察使王永從与弟崇信軍承宣使永錫創建、賜額為慈愛和尚道場寺、有塔十一層、及有藏經五千四百八十卷印板作印経坊吳興府志、後改法宝禪院成化府志、今廢乾隆府志とによって明らかである。

しかれば、増上寺本は先に円覚禪院版であると述べたが、それはこの二つの地方志に言う円覚禪院が創建された当時に摺刷されたものなのであるうか。

増上寺本『大方広修多羅了義經』の刊記に、
本寺大藏經板、伏蒙、安撫大資相公趙、給錢贖過此経両序及諸經板、字損失者重新刊補、務在流通弘教・利益羣生、淳祐庚戌良月 円日、住持積清清穆謹誌謹誌の一文がある。

これによれば、南宋の淳祐一〇年（一二五〇）に、趙氏が給錢（捨錢）して諸経の印板を贖過（買い取る）し、文字が損耗しているところは新たに彫りなおして補った、という意味のことが記されているゆえ、この年次をさかいとしてひきつづき大藏經が刷られた

ことを述べているのであろうし、また、同刊記中の本寺の二文字が法宝資福禪寺であるとすれば、このころにはすでに、円覚禪院が改められ、かく称されていたものと思われるのである。

すなわちこのことから、増上寺本の大部分の経本の紙背に法宝大蔵経院の印影が認められるということは、とりもなおさず、この淳祐一〇年に趙氏によって諸経の印板、恐らくは円覚禪院版の印板がそのまま引き継がれ、法宝資福禪寺と寺額が昇格したことを一期として、法宝資福禪寺版の大蔵経刊行を企図したことが十分に考えられる。

それは、円覚禪院版において『湖州思溪円覚禪院新雕大蔵経律論等目錄』二巻が存するごとくに、法宝資福禪寺版においてもまた、『安吉州思溪法宝資福禪寺大蔵経目錄』二巻が有していることによっても肯んぜられよう。

しかし、増上寺本を円覚禪院版と法宝資福禪寺版とのそれぞれの目録に照らし合わせて見ると、明らかに円覚禪院版のそれとほぼ一致しているにもかかわらず、経本の紙背に法宝大蔵経院の印が歴然と捺してあるところをみると、次の二つの問題点が指摘される。

まず第一には、この法宝とは、ややもすれば法宝資福禪寺の法宝を指すものではないのかもしれない。すなわち、この法宝の二文字は、先の『湖州府志』と『帰安県志』とにおいて、寺額として法宝寺の寺号を賜ったがゆえに、その寺号を印として刻んだものとも思われるからである。もしそうであるならば、円覚禪院版に法宝大蔵経院の印影が認められたとしても、何ら疑義をさしはさむ必要も生じないことになるからである。

第二には、もしこの法宝の二文字が法宝資福禪寺を意味するもの

増上寺蔵宋版大蔵経について（伊 藤）

であるならば、寺格が法宝資福禪寺と改められた時には、大蔵経出版の計画が進められつつあったであろうから、この点を合わせ考えるならば、円覚禪院版の印板をもって法宝資福禪寺版大蔵経の印板として供されていたがために、その板木によって摺られた経本に法宝大蔵経院の印が捺されたのであったとすれば、法宝の二文字についての理解はほぼつく。

つまり、法宝資福禪寺版が追離部分の済字函から最字函までを加えることで一蔵とすべく努力したのであったが、その追離部分の雕板作業がまだ進捗して、法宝資福禪寺版としての大蔵経を上梓するため回収した円覚禪院版の板木の補刻等に時を費やしていたところから、追離部分の諸経板が完成していなかったとするならば、増上寺本において、天字号から合字号までのその殆んどの経本の紙背に、法宝大蔵経院の印影が見い出されたとしても、しごく当然のことと思われるのである。

しかしながら、増上寺本の全体は天字号から合字号までの五四八函（一四四一部、五九二七巻）が収蔵されている以外、いわゆる追離部分に相当する二四部四五〇巻までの五〇函が全く含まれておらず、たとへ、円覚禪院版の印板が法宝資福禪寺版のそれとして用いられたであろうとしても、増上寺本は確かに円覚禪院版の印板によって刷られたのであるから、円覚禪院版であると決定してさしつかえないと思うのである。

注等略

（大正大学大学院）